
神喰 - カミクイ -

戦国アサシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神喰・カミクイ -

【Zマーク】

Z0188Z

【作者名】

戦国アサシン

【あらすじ】

少年、喰淵翼羽が『あいつ』に出会った時、少年は神をも食す貪欲な存在へと、成り上がり、成り下がる…これが新たな神話劇！ !とか格好つけてみたりして（笑）

『お主は儂を、愛して食せ』

一話 一年二組（前書き）

小説を読む上で。

この小説には神が出てきますが、全く実在しない神ですので、そこは理解しておいて下さい。

だって僕、神話とか大して詳しくないので。

それでも良ければ、是非読んでください、

あ、あと、文章力低くてすいません（・・・）

一話 一年二組

「僕の最大の失敗はお前と出会った事。

僕の最大の成功はお前を助けた事だ」

「僕の最大の失敗はお主と出会った事。

僕の最大の成功はお主と助けられた事じゃ」

僕達は向かい合い、互いに呴く。

あいつは僕を、僕はあいつを否定するようにな。

あいつは僕を、僕はあいつを認めるようにな。

二人を打ち消し合つかのように、僕とあいつは呴く。

なぜなら、僕達は一人で一つだから。

僕達は一心同体だから。

僕が欠けても、あいつが欠けても。

それだけで、僕はあいつで無くなるし、あいつも僕で無くなるのだ。

あいつは僕で僕はあいつ。

僕はあいつであいつは僕。

僕は僕であいつはあいつ。

あいつはあいつで僕は僕。

それだけのことなのだ。

そして僕達はもう一度互いに呴く。
確かめるように。

愛であるように。

綻びを紡ぐために。

もう一度呴く。

「僕はお前を」

「僕はお主を」

「僕はお前を」

「僕の言葉を、だ。」

* * *

桜綿市^{おうしま}の、公立坂上学園にて。

夕焼けの光が差し込む二年三組の教室の中、会話を交わしている少年と少女がいる。

一方は、僕こと喰淵吳羽^{くいぶちぐは}。

人を信頼しない事に置いて、絶対的な自信を持つ、嫌な男で、そんな嫌な男に友達が多い訳が無く、友達の数は十に満たない。けれど、そんな僕の数少ない友達と、今会話してるわけだ。

まあ、今日は学級委員の仕事として、話し合いをしてるだけなんだけどな。

「提案なんだが、帰つていいか?」

僕は、唐突に提案する。

しかし、そんな提案が通るわけもなく。

「ダメダメ。任命されたからには、しっかりと職務を全うしましょうねー」

あっさり却下される。

まるで子供をあやすかのように僕の提案を却下したのは羽翅白鶴^{はせなじらづる}。睫毛が長く切れ長な目、女性にしては高い背丈、他の女子よりも大きいバスト、細い手足、透き通るような肌、そしてなによりポニーテール（僕はポニーテールが大好きなのだ）。正に、美しさにおいては右に出る者がいない、少女。

名前に劣らぬ、美貌持つ少女。

それが鶴なのだった。

鶴は、小学生の頃からの付き合いで、所謂幼馴染み。

それ故、僕も彼女を信頼し、彼女も僕を信頼している。

絶対的な、信頼関係が築かれているのだ。

「任命ね……。僕の場合は、任命というより、押し付けってのが正しいんだろうな」

鶴は圧倒的な信頼と支持を得て学級委員に任命された。

けれど僕は、圧倒的な信頼と支持のなさによりて学級委員を押し付けられたのだ。

任命ではなく押し付け。

ここには大きな懸隔があり、埋まるはずもない溝があつた。だからと言つて、僕は何も感じないけど。

信頼されない事と、信頼しない事には慣れているのだ。

「呉羽は本当にネガティブだよね。良く考へてもみなよ。その御蔭で、私と同じ委員会に入れたんだよ?どう、嬉しいでしょ?もつと物事をポジティブに考えよ!」

「ポジティブねえ……」

お前みたいに、ポジティブになれたら苦労しないよ、とは言わな
い。

言つたらまた、ポジティブな事を言われるだけだ。

「僕には、無理だよ。僕は、ほら、あれだ。人生を楽しく考えよう

とか、そう言う概念が無いんだよ。人生に楽しみを見つける事に、

絶望した人間だからさ。希望を見出す事に、絶望した人間だから。

ポジティブとかネガティブとか、そういう問題じゃないんだよな

「分かってるよ。分かってるけど、そんな呉羽だからこそ。……私は

は楽しみを知つて欲しいんだよ。何かないの?これは楽しそうだな

あ、とか。これは楽しいだろう、とか。そうやつて思える物が、何

かないの?」

「楽しい事、ね」

言われて僕は少し考える。

だけど、考えれば考えるほど、楽しい事は思い浮かばず、むしろ

今までの辛いことや悲しい事を思い出してきてしまった。

ああ、あんな事もあつたなあ。

思い出すだけで心が挫けそうだ。

いやもう、挫けてるのかもしれないけど。

そんな僕に見かねたのか、鶴は口を開く。

「こ、これはあくまで例だけど！本当に本当に例だけど！具体的でしかないんだけど！具体的以外に他ならないんだけど！わ、私が思うにはですね！こ、こここここここここ、恋とかが良いんじゃないでしようかつ！決して私が恋したいとかそういう訳ではなく！ただの具体例でしかないんだけどね！」

「鯉？」

「そ、そういうお決まりの勘違いは良いからーいや、勘違いしてもいいけどーいや、やっぱり勘違いしないで！でもでも、やっぱり勘違いして！」

顔を真っ赤にして、慌てふためいて叫び散らす鶴。

はつはつは。

急がしい奴だ。

何に急いでいるのかは、僕には分からぬけど。

それにして、恋か。

故意でもなく、鯉でもなく、恋。

つまり恋愛って意味なんだろうけど、生憎僕は恋愛とは対極的な位置にいる人間なんだよな。好きな人とか、できたことないし。付き合つたことないし。ラブレターも貰つたことないし。バレンタインデーには、鶴か妹達の義理チョコしかもらえないし……。やばい。

どんどん暗い気持ちになつていぐ。

暗い気持ちのまま、僕は呟く。

「特に興味なしかな……」

「そつか……」

僕と同じような声色と声のトーンで、鶴も呟く。
なにやら、とか明らかに落ち込んでいるようだ。

それほどまでに、僕の事を慮つて恋愛という具体例を出してくれたのか。

優しい奴だよ、お前は、本当に。

僕は慰めの意味を込めて「ありがとうな」と言しながら鶴の頭を撫でる。

ふんわりとした感覚が手の中にいっぱいに伝わる。良い髪してるよ
なあ、こいつ。サラサラでふわふわで、撫でていて安心するといつ
か、なんというか。とりあえず良い髪だ。

僕がそんな事を考えている内に、鶴はみるみる顔を真っ赤にし、
顔が先ほど以上の赤身を帯びた辺りでボン、という音を立てて爆発
した。

「うわっ、熱っ！」

あまりの熱に、僕は手を離す。

こいつ、どうこう体の構造してやがんだ。

顔が真っ赤になつて爆発する人間なんて、万国共通お前だけだぞ、
多分。万国を見てきたわけではないから、絶対そうとは言えないけ
ど、ほぼ間違いないだろう。

顔面爆発女。

うーん、文字にして表してみると、ただの化物だな。

「いや、いやにして、頭にやでて、あ、あああああ、頭、いや、に
やんで頭にやでて、あああああああ」

完璧に故障、いや暴走した鶴。

あ、痛い、痛いから物を投げつけないで！

「お、落ち着けって！物を投げるな！痛いから、落ち着けって！な
んだ、もう一回名でれば直るのか！？」

と思い、もう一度僕は頭に手を伸ばす。

すると、手をパシッと叩かれた。

「女の子の！頭を！勝手に撫でたりしちゃダメなの！分かった！分
かんなかつたら、今度は机」と……

と言いながら立ち上がり、机を持ち上げる鶴。

だれだよ、美しさに置いて右に出る者はいないとか言った奴！

可憐じやねえよ、美麗でもねえよ！

野蛮だよ、こいつ！

「わ、分かつたから！机を置け、とりあえず置け！」

机を置いて、椅子に座りなおす鶴。

「分かれば良いのよ、分かれば」

「どうやら落ち着いたらしい。

いやあ、恐いもん見た。机を持ち上げる女子とか見たことなかつたからなあ。おそらく、今後見る事も無い。というか、今後見たいとも思わない。

と、思った所で。

僕は時計を確認する。

「もう六時じやん。鶴、帰ろうぜ。もう下校時間だ」

時計の針は六時五分を刺していた。五分オーバーだが、細かい事は気にしない。

「ほんとだ。もう、呉羽がふざけるせいでの時間通りに終わらなかつたじやん！」

完璧に自分の暴走を棚に上げてやがる。もう忘れている節さえある。

まあ、別に良いんだが。

続きを明日に回し、テキパキと片付けを終わらせ、書類を鞄に詰め込み、僕達は教室を出る。

階段を下り、下駄箱で靴に履き替え、校門の近くの駐輪所に停めておいた、自転車に僕は乗る。

「じゃ、また明日な」

そう、僕達はここで別れるのだ。

僕の家と鶴の家は正反対の位置にあるのだ。僕の家から鶴の家までは、およそ一時間はかかる。だから、遊びに行く時が非常に面倒なのだ。

まあ、最近は遊びに行つてないけど。

「じゃーね。また明日」

そう言って、僕達は、手を振りながら別れた。

また明日。

今日は月曜日。

明日は火曜日。

僕の一週間は、始まつたばかりだ。

一話 一年二組（後書き）

『だが断る』

こうやってあとがきで、僕の大好きなマンガや偉人の名言を残していくたいと思います。よろしければ、こちらも呼んで下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0188z/>

神喰 - カミクイ -

2011年11月30日22時57分発行